歴史のまち、羽曳野 2　米づくりの始まりと西浦銅鐸

米づくりのむら

今から2,300年前ごろ、水田で稲を育てる米づくりが、大阪平野でも始まりました。狩りや漁、木の実拾いによる食糧の確保に比べると、田を拓き、用水路を引くための労働は楽ではありませんが、秋には豊かな実りをもたらすことになりました。この時代を弥生時代と呼んでいます。

石川を見下ろす丘の上にある東阪田遺跡や壺井遺跡は、いち早く現れた米づくりを営むむらの跡です。しかし、水田を作るのに適した、肥沃で水持ちのよい土地が限られていたためか、むらの規模も小さく、大きく発展することはありませんでした。

弥生時代の中頃になると、飛鳥川沿いの飛鳥第2散布地（遺跡）や、東除川沿いの島泉北遺跡でもむらが営まれるとともに、石川の流域では、喜志遺跡と呼ばれる大きなむらが、東阪田から富田林市喜志町、木戸山町にかけての広い台地の上に出現しました。

およそ200mの範囲を囲む環状の溝の内側には、数十軒の竪穴住居に混じって、刈り入れた稲を蓄える高床倉庫の屋根が、ひときわ高くそびえていたことでしょう。

銅鐸のまつり

昭和53（1978）年、西浦小学校の校舎建設の工事現場から、新品の10円硬貨のように鈍く輝く銅鐸が発見されました。浅い穴の中に大事に横たえて埋めた状態で、むらの大切な宝物であったことがわかります。

高さ89.6cmの大きさ、精巧なもよう、製作技術の確かさは、現在、500個近く知られている銅鐸の中でも注目に値します。平成3(1991)年には国の重要文化財に指定され、翌年には海を渡って米国ワシントンのサックラー美術館で展示さまました。

銅鐸は弥生時代になって、朝鮮（韓）半島から作り方の基本や使い方が伝わった謎の多い遺物です。ごくまれに、表面に浮き彫りで表されることがあるシカやサギ、人物などの絵画は、大地や稲の精霊、祖先を象徴するもので、銅鐸は稲作のまつり、すなわち、神に豊作を祈り、感謝する際に用いられたと考える説が有力です。

むらの豊かさのシンボルであった銅鐸が、その役割を終え地中に埋められたままになったのは、弥生時代の終り、いまから1,800年ほど前と考えられます。この頃、喜志のむらは衰退し、変革の時期を迎えた世の中の混乱を避けるように、それよりも高い丘陵の頂にむらが営まれます。むらびとたちの祈りも、時代とともに変わっていったのでしょうか。

（世界遺産登録準備室）

サラダボール

「長　寿」

休日の昼下がり、閑静な住宅街でめったに聞かれぬ幼い子どもたちの歓声が響いてくる。訪ねてきた孫たちが通りへ出て遊ぶ姿が珍しいのは最近の世相であろうか。

丘陵開発してこの地に住宅ができたのは、かれこれ40数年前になる。若かった居住者のほとんどが後期高齢を迎え、育った子どもたちはそれぞれに巣立っていき、今ではあちこち老人ばかりが目立つ日常へと変化した。

子育てや、住宅ローンに追われた歳月は、新居を設け希望に満ちて働き続けてきた人生の最も充実した時期であっただろう。

今では子育て時代の活気は失せて、腰や膝の痛みを抱えた住人の医者通いが話題の中心となることが多くなってきた。

20世紀後半のめざましい経済発展は人の心に、また生活に、大きな変化をもたらしたが、やがて定年を迎えた親たちが得た長寿社会とは、本当に幸せな老後と言えるものだっただろうか。特に近年の地球環境の破壊、世界規模の経済崩壊による社会生活への影響は、著しい不安となって人の心を脅かしている。それに加えて穏やかだったこの国の事とも思えぬ陰惨な事件が増加の傾向にあるという。

このような時、またしても考えさせられるのは"長寿"は本当に"寿"なのか？長く生きてきたことが辛い哀しいことに出会う日常になったのは何故だろうか・・・。

"寿"の文字を辞書で引いてみたが、「祝う」「めでたさ」「長命」などと記されている。あの狂奔に満ちた豊かさは人々にとめどない欲望とぜいたくな暮らしを覚えさせ、清貧、謙虚な心を失わせた。特に食生活においては、その豊かさが病を呼び、本来の幸せの価値観を損なってしまったように思える。

高齢者の増加に伴って福祉を支える財源が危ぶまれる現状を緩和する為にも、健やかな長寿を願わずにはいられない。

ともあれ膝や腰の痛みを治療しつつ体を動かして、人々との交わりの中で元気に日々を楽しんでいる高齢者も多いことに、安心と尊敬を感じ、本当の意味での寿命を思うのである。

（人権推進課）